

日本画制作研究Ⅰ（AFM01）

通年

Japanese-style Painting ResearchⅠ

大学院 美術専攻（修士課程）

年次	1年
対象	23～21FM
単位数	12.0単位
担当教員	森山知己

授業の概要

古典技法を研究することで、今日的な表現手法における日本画の持つ可能性を確認し、同時に実際の制作を通じて新たな独自表現を獲得することを目的としている。

自らの制作を深め展開していく上で必要とされる課題克服を、実施可能な研究計画として作成し、それを基に制作を行う。

到達目標

- 日本画の表現における材料・その使用の歴史の変遷を学び、現代の表現においてそれらを使用する意味を確認理解できる。
- 日本画の伝統と呼ばれる存在を検証する作業を通じて、現代美術表現としての日本画について考え、自身の制作を行うことができる。

評価方法

完成作品 60%（到達目標2）

研究発表（個展、展覧会出品、コンクール出品など）、研究資料作成（調査研究）など 30%（到達目標1）

レポート 10%

注意事項

展覧会見学、スケッチ等を実施する。

必要に応じて個別の課題を出す場合がある。

学外での調査研究を行うことがある。

授業計画

4月 オリエンテーション・研究計画についての検討

制作計画の立案

※作品資料（作品またはポートフォリオ）の持参

5月 古典研究（模写・描画技術など）・制作指導

研究課題に関する進行確認

7月 制作作品提出 相談・助言指導を行う

9月 古典研究（模写・描画技術など）・制作指導

完成作品 講評会

11月 制作指導

前期制作作品の反省を踏まえた後期制作の展開について検討

1月 作品制作 指導

2月 完成作品プレゼンテーション 講評会

授業外学習

美術館・展覧会鑑賞を通じて様式、材料・技法に関する調査・確認を行う。

教科書

特に使用しない。

参考書

参考文献は課題、各自の興味関心に合わせて適宜紹介する。

備考

特になし

年次	2 年
対象	22 ～ 20 FM
単位数	1 2 . 0 単位
担当教員	森山知己

授業の概要

日本画制作研究Ⅱで作成した研究計画に基づき制作の展開やさらなる進化を追求し、加えて視野を広げることで客観的な分析を自らに加え制作の広がり、思考の柔軟性にも配慮し探求することを目的とする。

【アクティブラーニング】グループディスカッション、フィールドワーク、プレゼンテーションを取り入れている。

【フィードバック】演習課題の講評や省察などのフィードバックを含めた指導を行う。

【ICTを活用した 双方向型 授業】本授業では、Google Classroom を活用して双方向型授業を展開します。

- ・ 授業内容を予め提示します。（予習 復習に活用してください。）
- ・ 課題はGoogle Classroom を通じて提示し、提出していただきます。
- ・ 都度、必要な資料、確認しておくべき Web サイトなどを提示します。
- ・ 授業時間外での 授業や 課題に関する質問は、Google Classroom のストリーム機能を活用し、質問できるようにします。
- ・ 授業に関する学生相互の意見交換等を目的とし、Google Classroom のストリーム 機能を活用します。

到達目標

- 1.制作作品の内容深化に加え、ディスカッション、プレゼンテーションを通じて自身の思考の論理性、説得力、魅力を伝えることができる。
- 2.個展開催・展覧会出品・コンクール出品など、作品発表手法、またその形態を自ら選び社会に発表することができる。

修士課程の集大成として、今後の作家活動に繋がる修了作品の完成を目指す。

評価方法

修了作品 80%（到達目標1.を評価）

学内外での発表（個展・展覧会出品など）・質疑応答・状況 40%（到達目標2.を評価）

注意事項

展覧会や美術館の鑑賞などを行う場合がある。

必要に応じて個別の課題を出す場合がある。

学外での調査研究を行うことがある。

授業計画

5 月 修了作品制作に向けての年間スケジュールの確認。

修了制作内容・プランに関する検討・相談

7 月 作品制作経過報告 メール等で相談・助言指導を行う

9 月 作品制作プレゼンテーション

修了制作プランに対する助言

11月 修了制作中間報告 助言指導

1月 修了制作プレゼンテーション

修了制作展

（個展開催・展覧会出品などに関してはその都度、助言指導を行う）

授業外学習

個展開催、展覧会出品、コンクール出品など、積極的に作品の発表を行う。

教科書

使用しない。

参考書

参考文献は課題、各自の興味関心に合わせて適宜紹介する

備考

年次	1 年
対象	23 ～ 21 FM
単位数	1 2 . 0 単位
担当教員	五十嵐英之 川上幸之介

授業の概要

五十嵐クラス

これまで取り組んできた制作について見直し、今後の制作について考える。

専門的な技術や表現について、様々な作家の活動や作品を調査しその内容をまとめる。それらの情報について、自らの表現との関連性を分析する。時代性や社会とのかかわりについても意識し、制作制作を展開する。学外に出品できる作品を完成させる。

〔川上〕

本講では、卒業後の学生が現代美術家として自立するための一助となるよう、実践的な素養とスキルを身に付けることを目的とする。そのため、作品のコンセプトと作品自体の相互の関係を理解し、それをオーディエンスに伝えるためのプレゼンテーションの能力も学ぶ。

到達目標

五十嵐クラス

- 1.自らのポートフォリオを作成し、これまでの展開を振り返る。
- 2.自らの作品と関連性のある作家について、資料を作成する。
- 3.自らの作品を完成させる。

〔川上〕

- 1.作品のコンセプトと作品自体の相互の関係を理解できる
- 2.ステイトメントの作成ができ、作品のプレゼンテーションができる。

評価方法

五十嵐クラス

レポート①25%（到達目標 1 の評価）

レポート②25%（到達目標 2 の評価）

完成作品50%（到達目標 3 の評価）

〔川上〕

・制作活動 60%、プレゼンテーション 10 % ステイトメント制作10%授業態度 20 %に基づいて総合的に評価する。

注意事項

学外プロジェクトや、学外研修（展覧会見学など）の学生リーダーとしての役割を課す場合がある。

授業計画

〔両クラス共通〕

- 1、オリエンテーション
- 2、研究テーマと計画
- 3、実制作およびレポート作成
- 4、実制作およびレポート作成
- 5、実制作およびレポート作成
- 6、実制作およびレポート作成
- 7、実制作およびレポート作成
- 8、実制作およびレポート作成
- 9、実制作およびレポート作成
- 10、実制作およびレポート作成
- 11、実制作およびレポート作成
- 12、実制作およびレポート作成
- 13、実制作およびレポート作成
- 14、実制作およびレポート作成
- 15、中間研究発表会
- 16、実制作およびレポート作成

- 17、実制作およびレポート作成
- 18、実制作およびレポート作成
- 19、実制作およびレポート作成
- 20、実制作およびレポート作成
- 21、実制作およびレポート作成
- 22、実制作およびレポート作成
- 23、実制作およびレポート作成
- 24、実制作およびレポート作成
- 25、実制作およびレポート作成
- 26、実制作およびレポート作成
- 27、実制作およびレポート作成
- 28、実制作およびレポート作成
- 29、実制作およびレポート作成
- 30、研究発表会

授業外学習

五十嵐クラス

自らの表現との関連性のある作家等の資料を収集するため、美術館や美術関係施設に行って調査活動をおこなう。

〔川上〕

・ 次回の授業内容を確認し、その範囲の専門用語の意味等を調べて理解しておくこと。

教科書

〔五十嵐クラス〕 ・ 『Live with Drawing』 描き合うこと 描き続ける事 ・ 『Live with Drawing』 視点 精神分析 ・ 『Live with Drawing』 五感 ・ 授受

〔川上〕 参考資料はプリントし、配布する。また、国際展や現代アートの解説の際には、プロジェクターやモニターを用いる。

参考書

〔両クラス〕 参考文献は、適宜紹介する。

備考

特になし

年次	2 年
対象	22 ～ 20 FM
単位数	1 2 . 0 単位
担当教員	五十嵐英之 川上幸之介

授業の概要

〔五十嵐クラス〕 自らの作品ポートフォリオを完成させ、作品のコンセプトや今後の展開について考える。
他者作品に関する資料を収集し、その資料と自らの実作品との関連性について論述する。
実験的に作品を制作しながら、修了制作につながる作品を複数点完成させる。
〔川上〕
本講では、西洋画制作研究Ⅰで身につけたスキルをさらに発展させるため、作品を始点として鑑賞者の思考を促すディスコースへの理解を深める。そのため美術史、美学の他、人文科学全般を領域横断的に学ぶ。これにより、スタジオ制作後も、自主的に活動できる芸術家の育成を目的としている。

到達目標

- 1.修了後の活動へとつながるポートフォリオを完成させる。
 - 2.自らの作品分析レポートに題目をつけて完成させる。
 - 3.実作品を複数点完成させ、表現上最も相応しい展示を行う。
- 〔川上〕
- 1. 現代アート、またそれに影響を与えているセオリーを説明できる。

評価方法

〔五十嵐クラス〕
作品ポートフォリオの提出（到達目標 1 の評価）
作品分析レポート 2 5 %（到達目標 2 の評価）
完成作品の展示／個展及び展覧会やコンクールへの出品 5 0 %（到達目標 3 の評価）
〔川上〕
・制作活動 50%、プレゼンテーション 10 % ステイトメント制作10% 授業態度 10 % 現代アートに関するレポート 2 0 %に基づいて総合的に評価する。

注意事項

学外プロジェクトや、学外研修（展覧会見学など）の学生リーダーとしての役割を課す場合がある。

授業計画

- 〔両クラス共通〕
- 1、オリエンテーション
 - 2、研究テーマと計画
 - 3、実制作およびレポート作成
 - 4、実制作およびレポート作成
 - 5、実制作およびレポート作成
 - 6、実制作およびレポート作成
 - 7、実制作およびレポート作成
 - 8、実制作およびレポート作成
 - 9、実制作およびレポート作成
 - 10、実制作およびレポート作成
 - 11、実制作およびレポート作成
 - 12、実制作およびレポート作成
 - 13、実制作およびレポート作成
 - 14、実制作およびレポート作成
 - 15、中間研究発表会
 - 16、実制作およびレポート作成
 - 17、実制作およびレポート作成
 - 18、実制作およびレポート作成
 - 19、実制作およびレポート作成
 - 20、実制作およびレポート作成

- 21、実制作およびレポート作成
- 22、実制作およびレポート作成
- 23、実制作およびレポート作成
- 24、実制作およびレポート作成
- 25、実制作およびレポート作成
- 26、実制作およびレポート作成
- 27、実制作およびレポート作成
- 28、実制作およびレポート作成
- 29、実制作およびレポート作成
- 30、研究発表会

授業外学習

〔五十嵐クラス〕
影響を受ける作家や作品の調査活動として、作家のアトリエや美術館などを訪問する。
〔川上〕
・ 次回の授業 内容を確認し、その範囲の専門用語の意味等を調べて理解しておくこと。

教科書

特に使用しない。
〔川上〕 参考資料はプリントし、配布する。また、国際展や現代アートの解説の際には、プロジェクターやモニターを用いる。

参考書

参考文献は、適宜紹介する。

備考

特になし

映像制作研究Ⅰ (AFM05)

通年

Visual Image Research I

大学院 美術専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	23 ～ 21 FM
単位数	1 2. 0 単位
担当教員	 小出肇  馬場始三  中川浩一  丸田昌宏

授業の概要

映像やデザインにかかわる分野で、芸術・文化・情報科学・社会科学などの幅広い視点の中で学部教育で得たあらゆるメディアにおける表現技術を基に、「情報化社会」に対応した、コンテンツを企画・制作できる人材の養成を目標として制作研究を行う。

到達目標

- 1 映像制作研究の基本となる各手法を理解し、自ら実践できる。
- 2 研究の成果を論文や作品としてまとめる。
- 3 成果物を社会に発表する。

評価方法

- ・到達目標1は授業に取り組む態度・姿勢、2は課題、3は最終の成果発表により評価し総合計60点以上を合格とする。
- ・評価の比率は、態度・姿勢30%、課題60%、成果発表10%を基準とする。

注意事項

締め切り厳守とする。

授業計画

第1週～第30週（小出・中川・丸田・馬場）

- ☆ジャンルやデバイスにとらわれない自由な映像作品を、企画から制作まで実践を通して創造する。
- ☆各自の実制作、研究の進行状況に応じて適宜指導を行う。
- ☆作品完成後の合評

授業外学習

各自の研究テーマに関して情報を収集すること。

教科書

使用しない。

参考書

参考文献は、適宜紹介する。

備考

なし

映像制作研究Ⅱ（AFM06）

通年

Visual Image ResearchⅡ

大学院 美術専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	22 ～ 20 FM
単位数	1 2 . 0 単位
担当教員	👤 小出肇 👤 馬場始三 👤 中川浩一 👤 丸田昌宏

授業の概要

映像制作研究Ⅰの後続研究である。映像制作研究Ⅰで研究したテーマをさらに発展させ、各自が取り組んできたテーマを質的な向上を目指して制作研究を行う。

到達目標

- 1

映像制作研究の基本となる各手法を理解し、自ら実践できる。
- 2

研究の成果を論文や作品としてまとめる。
- 3

成果物を社会に発表する。

評価方法

- ・到達目標1は授業に取り組む態度・姿勢、2は課題、3は最終の成果発表により評価し総合計60点以上を合格とする。

・評価の比率は、態度・姿勢30%、課題60%、成果発表10%を基準とする。

注意事項

※各自の実制作、研究の進行状況に応じて適宜指導を行う。

授業計画

第1週～第30週（小出・中川・丸田・馬場）

- ☆ジャンルやデバイスにとらわれない自由な映像作品を、企画から制作まで実践を通して創造する。

☆各自の実制作、研究の進行状況に応じて適宜指導を行う。

☆作品完成後の合評

授業外学習

各自の研究テーマに関して情報を収集すること。

教科書

使用しない。

参考書

参考文献は、適宜紹介する。

備考

なし

彫刻制作研究Ⅰ（AFM07）

通年

Sculpture ResearchⅠ

大学院 美術専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	23 ～ 21 FM
単位数	1 2 . 0 単位
担当教員	田丸 稔

授業の概要

塑造による具象表現、また各種素材を用いた環境造形や彫刻表現全般に関わる構成や秩序、技法等の総合的な研究を通して、表現の多様性を探り、質の高い制作表現の追求をする。

【ICTを活用した 双方向型 授業】

本授業では、Google Classroom を活用して双方向型授業を展開します。

- ・授業内容を予め提示します。（予習 復習に活用してください。）
- ・課題はGoogle Classroom を 通じて提示し、提出していただきます。
- ・都度、必要な資料、確認しておくべき Web サイトなどを提示します。
- ・授業時間外での授業や 課題に関する質問は、 Google Classroom のストリーム機能を活用し、質問できるようにします。
- ・授業に関する学生相互の意見交換等を目的とし、 Google Classroom のストリーム機能を活用します。

到達目標

- （１）環境造形や彫刻表現全般に関わる構成や秩序、技法等の総合的な研究の質的達成。
- （２）作品 4点以上の提出、うち 1 点以上は対外的な発表（展覧会出品等）をすること。

評価方法

研究レポートおよびゼミナール形式の研究会における発表の状況に関する評価50%（到達目標 1 ）、学内外での研究発表(個展および展覧会等への出品)の状況についての評価50%（到達目標 2 ）とし、担当教員が合議して決定する。

注意事項

学内外での研究発表（個展および展覧会等）を推奨する。

授業計画

オリエンテーション

研究テーマと計画

- 第 1 回：実制作およびレポート作成
- 第 2 回：実制作およびレポート作成
- 第 3 回：実制作およびレポート作成
- 第 4 回：実制作およびレポート作成
- 第 5 回：実制作およびレポート作成
- 第 6 回：実制作およびレポート作成
- 第 7 回：実制作およびレポート作成
- 第 8 回：実制作およびレポート作成
- 第 9 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 0 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 1 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 2 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 3 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 4 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 5 回：中間研究発表会
- 第 1 6 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 7 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 8 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 9 回：実制作およびレポート作成
- 第 2 0 回：実制作およびレポート作成
- 第 2 1 回：実制作およびレポート作成
- 第 2 2 回：実制作およびレポート作成

第 2 3 回：実制作およびレポート作成
第 2 4 回：実制作およびレポート作成
第 2 5 回：実制作およびレポート作成
第 2 6 回：実制作およびレポート作成
第 2 7 回：実制作およびレポート作成
第 2 8 回：実制作およびレポート作成
第 2 9 回：実制作およびレポート作成
第 3 0 回：研究発表会

授業外学習

授業時間外は 1 週間 12 時間以上、自己の制作研究に集中し、理論的考察を試みる。

教科書

使用しない。

参考書

参考文献は、適宜案内する。

備考

特になし

彫刻制作研究Ⅱ（AFM08）

通年

Sculpture Research Ⅱ

大学院 美術専攻（修士課程）

年次	2 年
対象	22 ～ 20 FM
単位数	1 2 . 0 単位
担当教員	田丸 稔

授業の概要

彫刻制作研究Ⅰの継続研究として、塑造および環境造形、において、各自が取り組んできた各種の研究を、より高次の次元へと質を深める。到達目標【ICTを活用した双方向型授業】

本授業では、Google Classroom を活用して双方向型授業を展開します。

- ・授業内容を予め提示します。（予習 復習に活用してください。）
- ・課題はGoogle Classroom を通じて提示し、提出していただきます。
- ・都度、必要な資料、確認しておくべき Web サイトなどを提示します。
- ・授業時間外での授業や 課題に関する質問は、Google Classroom のストリーム機能を活用し、質問できるようにします。
- ・授業に関する学生相互の意見交換等を目的とし、Google Classroom のストリーム機能を活用します。

到達目標

- （１）環境造形や彫刻表現全般に関わる構成や秩序、技法等の総合的な研究の質的達成。
- （２）作品 4点以上の提出、うち 1 点以上は対外的な発表（展覧会出品等）をすること。

評価方法

研究レポートおよびゼミナール形式の研究会における発表の状況に関する評価50%（到達目標 1 ）、学内外での研究発表(個展および展覧会等への出品)の状況についての評価50%（到達目標 2 ）とし、担当教員が協議して決定する。

注意事項

学内外での研究発表（個展および展覧会等）を推奨する。

授業計画

- 第 1 回：実制作およびレポート作成
- 第 2 回：実制作およびレポート作成
- 第 3 回：実制作およびレポート作成
- 第 4 回：実制作およびレポート作成
- 第 5 回：実制作およびレポート作成
- 第 6 回：実制作およびレポート作成
- 第 7 回：実制作およびレポート作成
- 第 8 回：実制作およびレポート作成
- 第 9 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 0 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 1 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 2 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 3 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 4 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 5 回：中間研究発表会
- 第 1 6 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 7 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 8 回：実制作およびレポート作成
- 第 1 9 回：実制作およびレポート作成
- 第 2 0 回：実制作およびレポート作成
- 第 2 1 回：実制作およびレポート作成
- 第 2 2 回：実制作およびレポート作成
- 第 2 3 回：実制作およびレポート作成
- 第 2 4 回：実制作およびレポート作成
- 第 2 5 回：実制作およびレポート作成

第 2 6 回：実制作およびレポート作成
第 2 7 回：実制作およびレポート作成
第 2 8 回：実制作およびレポート作成
第 2 9 回：実制作およびレポート作成
第 3 0 回：研究発表会

授業外学習

授業時間外は 1週間 12時間以上、自己の制作研究に集中し、理論的考察を試みる。

教科書

使用しない。

参考書

参考文献は、適宜案内する。

備考

特になし

通年

大学院 美術専攻（修士課程）

授業計画24：制作研究設計3 制作実施（後藤・柳田・ウォルトン）
授業計画25：制作研究設計4 制作調整（後藤・柳田・ウォルトン）
授業計画26：制作研究設計5 制作研究発表（後藤・柳田・ウォルトン）
授業計画27：制作研究設計6 制作研究評価（後藤・柳田・ウォルトン）
授業計画28：制作研究報告1 研究報告書作成（後藤・柳田・ウォルトン）
授業計画29：制作研究報告2 研究報告書発表（後藤・柳田・ウォルトン）
授業計画30：制作研究報告3 研究報告書評価 後期まとめ（後藤・柳田・ウォルトン）

授業外学習

- ・デザイン研究は、自身でスケジュールを立てて日々取り組むこと。
- ・学内外で発表の機会を作ること。（展示会の実施や論文集への掲載など）
- ・学習時間の目安：合計360時間

教科書

使用しない。

参考書

参考文献・資料等は、適宜紹介する。

備考

無し

年次	2 年
対象	22 ～ 20 FM
単位数	1 2 . 0 単位
担当教員	👤 後藤秀典 👤 クリスウォルトン 👤 柳田宏治

授業の概要

デザイン計画研究Iの展開として、自身のテーマでデザイン研究の計画立案、実施、評価を行い、成果をまとめる。研究に当たっては、基本となる各種デザイン手法・技法を学習し、応用して取り組む。また、研究成果は研究会や展示会などで発表する。

- 【アクティブラーニング】問題解決学習、調査学習、グループ・ディスカッション、フィールドワーク、プレゼンテーションを取り入れている。
- 【フィードバック】研究に対する講評や省察などのフィードバックを含めた指導を行う。
- 【実務経験のある教員による授業科目】
- 後藤：元GKインダストリアルデザイン研究所、GKグラフィックス、デザインプラナリア勤務。グラフィックデザインおよびパッケージデザインの実務経験を基に実践的なデザインを指導している。
- 柳田：元三洋電機株式会社勤務。プロダクトデザイン、UIデザインの実務経験を基に実践的なデザインを指導している。

到達目標

- 1）デザイン研究の基本となる各種デザイン手法を理解、実践できるようになる。
- 2）研究の成果を論文や作品としてまとめ、発表する。

評価方法

- ・プロセス50%（到達目標 1 を評価）、提出作品50%（到達目標 2 を評価）の割合で評価する。

注意事項

- ・各種の実験データ、写真、資料、評価等は常に記録、保存し、研究報告書作成に役立てること。
- ・調査や発表等で学外で授業を行うことがある。

授業計画

- 授業計画01：前期オリエンテーション（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画02：制作研究計画 1 計画企画（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画03：制作研究計画 2 計画書作成（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画04：制作研究計画 3 計画書発表（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画05：制作研究計画 4 計画書評価（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画06：事前調査 1 調査企画（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画07：事前調査 2 実施計画書作成（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画08：事前調査 3 調査実施（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画09：事前調査 4 調査報告書作成（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画10：事前調査 5 発表/評価（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画11：制作研究構想 1 構想企画（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画12：制作研究構想 2 計画書作成（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画13：制作研究構想 3 計画書発表（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画14：制作研究構想 4 計画書評価（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画15：前期まとめ（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画16：後期オリエンテーション（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画17：制作研究調査 1 調査企画（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画18：制作研究調査 2 実施計画書作成（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画19：制作研究調査 3 調査実施（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画20：制作研究調査 4 調査報告書作成（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画21：制作研究調査 5 発表/評価（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画22：制作研究設計 1 設計企画（後藤・柳田・ウォルトン）
- 授業計画23：制作研究設計 2 制作方法検証（後藤・柳田・ウォルトン）

授業計画24：制作研究設計3 制作実施（後藤・柳田・ウォルトン）
授業計画25：制作研究設計4 制作調整（後藤・柳田・ウォルトン）
授業計画26：制作研究設計5 制作研究発表（後藤・柳田・ウォルトン）
授業計画27：制作研究設計6 制作研究評価（後藤・柳田・ウォルトン）
授業計画28：制作研究報告1 研究報告書作成（後藤上・柳田・ウォルトン）
授業計画29：制作研究報告2 研究報告書発表（後藤・柳田・ウォルトン）
授業計画30：後期まとめ（後藤・柳田・ウォルトン）

授業外学習

- ・デザイン研究は、自身でスケジュールを立てて日々取り組むこと。
- ・学内外で発表の機会を作ること。（展示会の実施や論文集への掲載など）
- ・学習時間の目安：合計360時間

教科書

使用しない。

参考書

参考文献・資料等は、適宜紹介する。

備考

無し

通年

大学院 美術専攻（修士課程）

・ラカンの精神分析理論について基本的な概念に関するレポート(50%) ラカンの理論に依拠して、現代の具体的な作品についてのレポート(50%) に基づいて総合的に評価する。

良知 暁

・授業の議論への参加態度（60％）授業から日々の実践へに関するレポート（40％）に基づいて総合的に評価する。

菅原 伸也

・美術や社会の事象についてのディスカッション（40％）、ポストコロニアリズムの概念に関するレポート（60％）に基づいて総合的に評価する。

注意事項

※本講では、その時の展覧会の開催状況により、学外実習を行います。

授業計画

川上 幸之介

1. オリエンテーション

上尾 真道（心理学）

- 1. イントロダクション
- 2. シュルレアリズムとラカン 1.
- 3. シュルレアリズムとラカン 2.
- 4. ラカンのまなざし論 1. 絵画とシミ
- 5. ラカンのまなざし論 2. 遠近法について

良知 暁

- 1. 現代美術と日常的な行為、身振りに関する概論
- 2. 複数の事例を取り上げ、様々なアプローチで考察する
- 3. レポートを基にした話し合い、相互フィードバック
- 4. 再度、複数の事例を取り上げ、自身の制作／生活を踏まえて考察する

菅原 伸也

- 1. ポストコロニアリズムとは何か
- 2. 美術とポストコロニアリズム（1）
- 3. 美術とポストコロニアリズム（2）
- 4. 岡本太郎と沖縄
- 5. 柳宗悦と朝鮮・沖縄

授業外学習

川上幸之介

・授業に出てくるキュレーターがキュレーションをする国際展を重点的に調査すること。

上尾 真道

・授業で取り上げた作家や作品について、美術館や書籍、インターネットなどでさらに調査すること。

良知 暁

・前期（2コマ）終了から後期（2コマ）が始まるまでの間に、レポートを提出すること。（レポートの内容や提出方法は前期授業内で説明する）

菅原 伸也

・指定された文献を読み、レポートを提出すること。

教科書

適宜プリントを配布する。

参考書

川上幸之介

・使用する文献の一部はコピー等で配布する。

上尾 真道

ミシェル・デヴォー『不実なる鏡』（人文書院）
・Steven Levine, Lacan Reframed, I.B.Tauris

良知 暁

・ジェームズ・C・スコット『実践 日々のアナキズムー世界に抗う土着の秩序の作り方』レベッカ・ソルニット『ウォークス 歩くことと精神史』その他
適宜紹介

菅原 伸也

- ・ 吉田憲司『文化の「発見」』岩波書店
- ・ 岡本太郎『沖縄文化論--忘れられた日本』中公文庫
- ・ 中見真理『柳宗悦--「複合の美」の思想』岩波新書

備考

※本講では、その時の展覧会の開催状況により、学外実習を行います。

年次	1 年
対象	23 ～ 21 FM
単位数	2．0 単位
担当教員	👤 松岡智子

授業の概要

フランスは19－20世紀半ばまで西洋における芸術運動の中心的な存在であり、印象派後も世紀末アカデミスム、新印象派、ポスト印象派、ナビ派、象徴主義、素朴派、野獣派、立体主義、ピュリスム、ダダイスム、シュルレアリスム、アンフォルメル等といった新運動の発信地となり、多くの外国人芸術家たちを引き寄せたことはよく知られている。わが国においても明治以降、フランスに留学した日本の芸術家達や雑誌、単行書、画集などの出版物、西洋美術のコレクションの形成等を通じて、フランス近代美術が我が国に次々と紹介され大きな影響を受け、現在でも美術館で開催されるフランス美術、とりわけ印象派、ポスト印象派をテーマとした展覧会には多くの来館者が訪れている。

日本美術史特論では日本人作家による絵画、彫刻、工芸、建築、デザイン、写真など様々な領域を通して、彼らがフランスの美術をいかに受容し新たな芸術を創造したかについて、社会的背景も視野に入れながら個々の作家やその作品及び芸術運動を概観するものである。

【アクティブラーニング】美術館での作品鑑賞および授業ではプレゼンテーションを取り入れている。

【フィードバック】課題に対する講評や省察などのフィードバックを含めた指導を行う。

【ICTを活用した双方向型授業】課題はGoogle Classroomを通じて提示し、提出していただく。また、授業時間外での授業や課題に関する質問は、

Google Classroomのストリーム機能を活用し、質問できるようにする。

到達目標

- 1．19－20世紀における日本美術について、フランス芸術の「受容」の側面から理解し説明できる。
- 2．これまでの美術史学における受動的な「受容論」、「受容研究」にとどまらず、従来の「影響論」ではない新たな創造行為に重心をおいたポジティブな「受容研究」の立場から、日本の美術について論述できる。そのために日仏の歴史的な背景や政治及び文化の力学についても関係づけられる。

評価方法

「日本美術史特論」のレポートの課題：19－20世紀半ばの日本においてフランス美術の影響を強く受けた作家や芸術運動を選び、その「創造的受容」について論述した4000字程度でレポート70％(到達目標2を評価)。その際、以下にあげた文献を参考にするとともに、関連する作品を必ず美術館等で見て研究し、課題レポートの内容に基づいたプレゼンテーション30%(到達目標1を評価)により成績を評価し、総合計60点以上を合格点とする。

注意事項

- ・レポート作成においては、様々な文献にあたり、作成上の基本的ルールを守り、特に引用した部分は明示しておくこと。
- ・レポートの提出期限を厳守すること。
- ・専門分野についての質問やレポートの作成など不明な点があれば、Google Classroomで質問し、早急に問題点を解決すること。

授業計画

受容美学とは

高橋由一の時代

日本近代洋画にフランス絵画がもたらしたもの(1) アングル、ドラクロワ、ミレー、クールベの場合

日本近代洋画にフランス絵画がもたらしたもの(2) 印象派の受容

日本近代洋画にフランス絵画がもたらしたもの(3) モリゾ、スーラ、ドニ、ピカソの場合

日本におけるアール・ヌーヴォー、アール・デコ

日本におけるマン・レイ

「美術館」の夢－大原孫三郎と松方幸次郎

国画創作協会の画家たちとフランス近代絵画

児島虎次郎について

藤田嗣治について

坂田一男について

パリの薩摩次郎八、福島繁太郎

「前衛」の到来

まとめ

授業外学習

- ・自学自習が基本であることを十分認識し、提示している教科書や参考文献を積極的に読むこと。
- ・専門分野の最新の情報を学術雑誌や展覧会図録等から収集するとともに、複数の美術館で多くの作品を見ることに努めること。

教科書

辻惟雄『日本美術の歴史』東京大学出版会、2012年、4-13-082086-8

参考書

兵庫県立美術館編『美術館の夢 松方・大原・山村コレクションでたどる』兵庫県立美術館、2002年、柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦編『世界歴史体系 フランス史3－19世紀なかば～現在－』山川出版社、2006年、宮崎克己『西洋絵画の到来 日本人を魅了したモネ、ルノワール、セザンヌなど』日本経済新聞出版社、2007年、永井隆則編『フランス近代美術史の現在 ニュー・アート・ヒストリー以後の視座から』三元社、2007年、『美術フォーラム 21(特集：日本におけるフランスー創造的受容)』(vol.23)、2011年

備考

(無し)

年次	1 年
対象	22 ～ 19 FM
単位数	2．0 単位
担当教員	松岡 智子

授業の概要

日本の20世紀芸術について、「美術」(絵画・彫刻・工芸)のみならず、写真、デザイン、パフォーミングアーツ、いけばな、書、ミュージアム建築、実験映像、アニメーション、マンガに至るまで幅広くジャンルを横断して、わが国の視覚芸術をトータルに俯瞰する。

【アクティブラーニング】美術館、ギャラリーでの作品鑑賞および授業ではプレゼンテーションを取り入れている。

【フィードバック】課題に対する講評や省察などのフィードバックを含めた指導を行う。

【ICTを活用した双方向型授業】課題はGoogle Classroomを通じて提示し、提出していただく。また、授業時間外での授業や課題に関する質問は、Google Classroomのストリーム機能を活用し、質問できるようにする。

到達目標

- わが国における近・現代の視覚芸術全般にわたって、それらの相互の関係と展開を歴史的な視点で俯瞰することにより、明治以降100年の日本の近・現代芸術史を立体的に捉え直すことを試み説明できる。
- 幅広く多様な視点から芸術を捉え直して得た新知見を論述することができる。

評価方法

2回のレポート提出(到達目標2を評価、2000字程度の美術館見学に関するレポートおよび4000字程度の期末レポート)(70%)と、プレゼンテーション(到達目標1を評価)により、総合計60点以上を合格とする。

注意事項

- 受講状況と授業中のプレゼンテーションを重視するので、意欲的に参加すること。
- 日本の近・現代美術を考える場合にも、諸問題の震源地として西洋の動向を知ることが不可欠であるので、双方へ関心の幅を広げる必要がある。
- レポート作成においては様々な文献に当たり、作成上のルールを守り、特に引用した部分は明示しておくこと。
- レポートの提出期限を厳守すること。

授業計画

回数	内容
第1回	オリエンテーション
第2回	導入としての日本近代美術史
第3回	1920年代；芸術の大衆化
第4回	1930年代；モダニズムと日本的なもの
第5回	1940年代；戦争下・占領下の芸術家たち
第6回	1950年代；日本美術の国際進出
第7回	1960年代(1) 視覚と認識の変革－オブ・アート、キネティック・アート、ジャンク・アート、コンセプチュアル・アート
第8回	1960年代(2) 社会状況の大変動と芸術－パフォーマンス・アート、アースワーク、アルテ・ポーヴェラ
第9回	1970年代(1) 高度資本主義社会と日本の美術
第10回	1970年代(2) インスタレーション、身体性、表現の多様化
第11回	1980年代(1) 新表現主義、ネオ・ジオ、シュミレーションイズム
第12回	1980年代(2) ポストものの派の台頭からバブル崩壊まで
第13回	1990年代(1) ネット社会とメディア・アート
第14回	1990年代(2) マルチカルチュラリズム、現実への回帰、物語性への追求
第15回	まとめ－新世紀の幕開けと成熟する表現

授業外学習

- ・先に挙げた科書や参考書以外にも、関心のあるテーマに関する文献を多く読むこと。
- ・テーマに即した展覧会を自主的に見学し、できる限り多くの作品を見ること。

教科書

監修：末永昭和『増補新装カラー版 20世紀の美術』美術出版社、2013年、978-4568400854

参考書

高階秀爾『20世紀美術』筑摩書房、1993年、高階秀爾『日本美術を見る眼』岩波現代文庫、2009年、『現代アート事典 モダンからコンテンポラリーまで;世界と日本の現代美術用語集』美術出版社、2009年、監修：酒井忠康『日本の20世紀芸術』平凡社、2014年。

備考

(無し)

現代美術論 (AFM16)

後期

Contemporary Art Theory

大学院 美術専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	23 ～ 21 FM
単位数	2． 0 単位
担当教員	 川上幸之介  崔敬華  松村圭一郎  菅原伸也

授業の概要

本講では川上（本学芸術学部）のコーディネートの下、崔 敬華先生、松村圭一郎先生、菅原 伸也先生が、各々授業の前半と後半を担当し授業を開催する。現代アートに影響を与えている、分野を領域横断的に学び、現代アートの新たな展開をつむぎだし、作品を構成する要素を再点検する。

崔敬華

- ・2000年代以降のアジア太平洋地域における現代美術の潮流を辿るため、いくつかの展覧会やビエンナーレを取り上げ、それぞれの展覧会や展示作品が、グローバルな美術の言説や、それぞれの社会の政治文化的状況にどのように呼応しているものなのかを、レクチャーとディスカッションを通じて考察する。

松村 圭一郎

- ・人類学の理論を概説しながら、人類学的視点から芸術、美、表現、価値などについて再検討することを目的とする。

菅原 伸也

- ・現代美術において、観客などが作品に参加しその一部となる「参加型アート」という形式が近年ますます用いられるようになっている。本授業では、参加型アートの理論的展開、多様な作品形態を検討する。

【ICTを活用した双方向型授業】

本授業では、Google Classroom を活用して双方向型授業を展開します。

- ・授業内容を予め提示します。（予習 復習に活用してください。）
- ・課題はGoogle Classroom を 通じて提示し、提出していただきます。
- ・都度、必要な資料、確認しておくべき Web サイトなどを提示します。
- ・授業時間外での授業や 課題に関する質問は、 Google Classroom のストリーム機能を活用し、質問できるようにします。
- ・授業に関する学生相互の意見交換等を目的とし、 Google Classroom のストリーム機能を活用します。

到達目標

川上幸之介

- ・現代社会における、芸術の役割を理解する。

崔敬華

- ・現代美術が拡張しつつある中、その世界的な流れに対応しながら、そして時には拮抗しながら、アジア太平洋地域の現代美術がどのように変化しているかを知る。
- ・議論を通じて、アーティストやキュレーターが、時代と場所にどのように関わり、応答するのかを分析し、その方法論や批評性について理解を深める。

松村 圭一郎

- ・人類学の視点を身につけ、あらたな芸術表現の可能性について、自分の考えを明確にすること。

菅原 伸也

- ・参加型アートの特徴や問題点、その理論的背景を理解する。

評価方法

川上幸之介

- ・授業態度 50% 作品 50%

崔敬華

- ・授業でのディスカッション（５０％）、レポート（５０％）

松村 圭一郎

- ・授業への積極的参加（コメント内容・議論への貢献） 60% 最終レポート 40%

菅原 伸也

- ・ディスカッション（40%）、レポート（60%）

注意事項

※本講では、その時の展示会の開催状況により、学外実習を行います。

授業計画

川上幸之介

1. オリエンテーション

崔 敬華

1. アジア太平洋地域の現代美術の急速な変化と発展について—問われる「現代性」
2. アジア太平洋地域の美術における「ローカル」「グローバル」とは何か？
3. アジア太平洋地域の現代美術交流とキュレーションについて
4. キュレトリアルとはどのような実践か？ I
5. キュレトリアルとはどのような実践か？ II

松村 圭一郎（文化人類学）

1. レヴィ＝ストロース『野生の思考』
2. ラトウール『虚構の「近代」』
3. 中沢新一『芸術人類学』
4. インゴルド『メイキング』

菅原 伸也

1. 参加型アートと「倫理」（1）
2. 参加型アートと「倫理」（2）
3. タニア・ブルゲラの実践
4. 映画『バンクシー・ダズ・ニューヨーク』鑑賞
5. 『バンクシー・ダズ・ニューヨーク』と参加型アート全般に関するディスカッション

授業外学習

川上幸之介

- ・授業に出てくるキュレーターがキュレーションをする国際展を重点的に調査すること。

崔 敬華

- ・アジア太平洋地域で行われている展示会や、美術館、アーティストによるイニシアチブ等を取り上げ調査し、レポートを提出。

松村 圭一郎

- ・事前に授業で扱う文献の指定箇所を読んでおくこと。

菅原 伸也

- ・指定された文献を読み、授業テーマに関連する展示会について調べ、レポートを提出すること。

教科書

使用しない

参考書

崔 敬華

- ・参考文献を適宜配布します。

松村圭一郎

- ・松村圭一郎『基本の30冊 文化人類学』（人文書院）

菅原 伸也

- ・山本浩貴『現代美術史——欧米、日本、トランスナショナル』中公新書
- ・クレア・ピショップ『人工地獄——現代アートと観客の政治学』フィルムアート社

備考

※本講では、その時の展覧会の開催状況により、学外実習を行います。

年次	1 年
対象	23 ～ 21 FM
単位数	2．0 単位
担当教員	 菅野優香

授業の概要

この授業では、ジェンダー、セクシュアリティ、人種の交差に焦点を当てて、視覚文化について考える。視覚文化では、個別のイメージやメディアを扱うだけでなく、見ることや見せることに関する日常的実践を取り扱う。つまり、視覚を通じて社会がどのように構築されているのかを問うのが視覚文化という分野である。この授業では、美術史や映画・メディア研究、批評理論、クィア・スタディーズなどの領域を横断しながら、視覚文化における、見ること、見せることの意味を探求しようと思う。視覚や視覚性は、政治や美学とどのように関わっているのか？視覚文化を通じて、わたしたちの生きる現代社会はどのように生成されるのか？こうした問題についても議論する予定である。

【 I C Tを活用した 双方向型 授業 】

本授業では、Google Classroom を活用して双方向型授業を展開します。

- ・ 授業内容を予め提示します。（予習 復習に活用してください。）
- ・ 課題はGoogle Classroom を 通じて提示し、提出していただきます。
- ・ 都度、必要な資料、確認しておくべき Web サイトなどを提示します。
- ・ 授業時間外での授業や 課題に関する質問は、 Google Classroom のストリーム機能を活用し、質問できるようにします。
- ・ 授業に関する学生相互の意見交換等を目的とし、 Google Classroom のストリーム機能を活用します。

到達目標

視覚文化におけるジェンダー、セクシュアリティ、人種の交差性について分析できるようになること。

- ・ 視覚文化を構成するさまざまな要素、テキストを批判的に読解できるようになること。
- ・ 視覚文化と、社会、政治、美学などの関係について学ぶこと。

評価方法

平常点（出席、議論への積極的な参加）：50%、ショートペーパー：50 %

注意事項

何らかの配慮や支援の必要な学生は事前に相談してください。

授業計画

回数	内容
第1回	視覚文化 (Visual Culture)とクィア・スタディーズ 1
第2回	視覚文化 (Visual Culture)とクィア・スタディーズ 2
第3回	視覚文化 (Visual Culture)とクィア・スタディーズ 3
第4回	政治と美学：ニュー・クィア・シネマ 1
第5回	政治と美学：ニュー・クィア・シネマ 2
第6回	政治と美学：ニュー・クィア・シネマ 3
第7回	フェミニズムと映画 1
第8回	フェミニズムと映画 2
第9回	フェミニズムと映画 3
第10回	アメリカのインディペンダント映画 1
第11回	アメリカのインディペンダント映画 2
第12回	アメリカのインディペンダント映画 3
第13回	ドキュメンタリー、実験映画、アヴァンギャルド 1

回数	内容
第14回	ドキュメンタリー、実験映画、アヴァンギャルド 2
第15回	ドキュメンタリー、実験映画、アヴァンギャルド 3

授業外学習

授業の前に課題テキストを必ず読んでくること。

教科書

授業の前に課題テキストを配布します。事前に読んでおいてください。

参考書

『「新」映画理論集成1―歴史・人種・ジェンダー』岩本憲児・武田潔・斉藤綾子編、フィルムアート社、1998年。

『アンチ・スペクタクル―沸騰する映像文化の考古学』長谷正人・中村秀之編、東京大学出版会、2003年。

ロラン・バルト『映像の修辞学』ちくま学芸文庫、2005年。

ロラン・バルト『ロラン・バルト映画論集』ちくま学芸文庫、1998年。

備考

特になし

現代映像論（AFM18）

後期

Contemporary Visual Image Theory

大学院 美術専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	23 ～ 21 FM
単位数	2．0 単位
担当教員	👤 小出肇

授業の概要

いわゆる商業映画以外の映画——実験映画、前衛映画、等を見つつ、ビデオで自らの日常等を撮影し、それを作品として完成させる。実際に撮ったものを編集し、作品化することによって、映像が溢れている現代における映像の可能性を探っていきつつ、コンテンポラリー・アートとしての映像作品の可能性をも追求したい。テーマに沿った課題作品を3回制作する。

【フィードバック】

課題作品の発表を行い講評を行う。

到達目標

- 1.ビデオを絵筆代わりに、自身の感覚を実験映像作品に結実できる。
- 2.企画意図をわかりやすくプレゼンできる。その作品の発表後のデータ推測も説明できる。

評価方法

3本の課題作品の提出を必須とし、3本目の作品を評価の対象とする。

平常点20％（到達目標2）、課題作品80％（到達目標1）

注意事項

- ・通常はモニターのある教室を利用。
- ・編集をしながらの講義の場合PCのある教室で授業を行う。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション 実験映画とは何かの概念の説明
- 第2回 過去の実験映画を見て、ディスカッション
- 第3回 課題作品(絶対映画)の発表および合評
- 第4回 過去の実験映画を見てのディスカッション（1）
- 第5回 過去の実験映画を見てのディスカッション（2）
- 第6回 過去の実験映画を見てのディスカッション（3）
- 第7回 撮影素材を実際に編集しながらの検討（1）
- 第8回 撮影素材を実際に編集しながらの検討（2）
- 第9回 課題作品（音楽に合わせての映像の編集）の発表および合評
- 第10回 過去の実験映画を見てのディスカッション（1）
- 第11回 過去の実験映画を見てのディスカッション（2）
- 第12回 過去の実験映画を見てのディスカッション（3）
- 第13回 撮影素材を編集しながらの検討（1）
- 第14回 撮影素材を編集しながらの検討（2）
- 第15回 課題作品(テーマは自由)の発表および合評

授業外学習

- 学習時間のめやす; 合計60時間
- ・個々の企画内容により授業外での企画、撮影、編集を行う。
 - ・企画内容により学外での撮影を行う場合もある。

教科書

使用しない

参考文献は、適宜紹介する。

参考書

授業内で適宜紹介する。

備考

特になし

年次	1 年
対象	23 ～ 21 FM
単位数	2．0 単位
担当教員	 小山格平

授業の概要

ユーザー、ビジネス、社会の3つの観点からデザインの役割と可能性を考察し、各種デザイン手法研究や最前線のデザイン事例研究を通して、実践的なデザイン計画ができるよう指導する。

- 【アクティブラーニング】問題解決学習、調査学習、グループ・ディスカッション、フィールドワーク、プレゼンテーションを取り入れている。
- 【フィードバック】研究に対する講評や省察などのフィードバックを含めた指導を行う。
- 【実務経験のある教員による授業科目】小山：株式会社KYデザインハウス代表としてデザインビジネスおよびデザイン制作の実務を行っている。

到達目標

- 1 デザイン計画に必要な各種デザイン手法を理解し実践できる。
- 2 デザイン計画のプロセスを理解し、各種デザイン手法を用いて実践的なデザイン計画を策定できる。

評価方法

- ・策定したデザイン計画に反映された手法の理解50%（到達目標1を評価）、デザイン計画内容50%（到達目標2を評価）の割合で評価する。
- ・60点以上を合格とする。

注意事項

- ・調査、研修等のため学外で授業を行うことがある。

授業計画

回数	内容
第1回	ユーザー、ビジネス、社会とデザイン (1)：デザイン計画の要素
第2回	ユーザー、ビジネス、社会とデザイン (2)：デザイン計画のフレームワーク
第3回	デザイン計画の手法 (1)：調査手法
第4回	デザイン計画の手法 (2)：問題定義、コンセプト構築手法
第5回	デザイン計画の手法 (3)：発想手法
第6回	デザイン計画の事例 (1)：製品デザイン
第7回	デザイン計画の事例 (2)：サービスデザイン
第8回	デザイン計画の事例 (3)：ソーシャルデザイン
第9回	デザイン計画の実践 (1)：テーマ設定
第10回	デザイン計画の実践 (2)：調査
第11回	デザイン計画の実践 (3)：問題定義～コンセプト構築
第12回	デザイン計画の実践 (4)：アイデア創出～デザイン設計・表現
第13回	デザイン計画の実践 (5)：商品化計画
第14回	デザイン計画の実践 (6)：プレゼンテーション
第15回	総括

授業外学習

- ・常に実社会における最前線のデザイン計画の事例に関心を持ちリサーチを行うこと。

・学習時間の目安：合計60時間

教科書

適宜資料を配布する。

参考書

適宜紹介する。

備考

(無し)

特別講義 I（AFM21）

前期

Special Lecture I

大学院 美術専攻（修士課程）

年次	1 年
対象	23 ～ 21 FM
単位数	2． 0 単位
担当教員	磯谷晴弘 松岡智子 田丸稔 馬場始三 クリスウォルトン 五十嵐英之 小出肇 張慶南 中川浩一 丸田昌宏 柳田宏治 森山知己 川上幸之介 後藤秀典

授業の概要

本研究科には様々な領域で活動している教員で構成されている。アート領域、デザイン領域、メディア映像領域、美術史領域であるが、領域の概論ではなく教員それぞれが抱えているコアな研究領域について解説し、何が面白く何が問題なのを語りかける。

【 I C Tを活用した 双方向型 授業 】

本授業では、 Google Classroom を活用して双方向型授業を展開します。

- ・ 授業内容を予め提示します。（予習 復習に活用してください。）
- ・ 課題はGoogle Classroom を 通じて提示し、提出していただきます。
- ・ 都度、必要な資料、確認しておくべき Web サイトなどを提示します。
- ・ 授業時間外での授業や 課題に関する質問は、 Google Classroom のストリーム機能を活用し、質問できるようにします。
- ・ 授業に関する学生相互の意見交換等を目的とし、 Google Classroom のストリーム機能を活用します。

到達目標

1. それぞれの教員の研究姿勢を知り、自己の研究の方法論を確率する参考とすることができる。
2. 幅広い分野領域に興味を持ち、リサーチすることができる。
- 3.
- 4.
- 5.

評価方法

- ・ レポートその他80％（到達目標 1 を評価）、授業に取り組む姿勢・態度20％（到達目標 2 を評価）の割合で評価する。
- ・ 1 4 回の評価を按分し60点以上を合格とする。

注意事項

修士 1 年生は受講することを強く推奨する。

授業計画

回数	内容
第1回	ガイダンス（磯谷晴弘）
第2回	松岡智子「芸術と歴史について考える」
第3回	森山知己「国の名前のついた絵画について」
第4回	後藤秀典「日本のブランディング考察（旗印・家紋）」
第5回	小出肇「芸術は、儲かる？」
第6回	五十嵐英之「人はなぜ絵を描き続けるのか」
第7回	中川浩一「アニメーションを『拡張』する」

回数	内容
第8回	クリスウォルトン 「絵がストーリーを語る」
第9回	張慶南「型のできる仕事について考える」
第10回	丸田昌宏「時代の求める映像コンテンツにとは」
第11回	柳田宏治「人間中心設計(HCD: Human Centered Design)について」
第12回	川上幸之介「作家活動と現代アート」
第13回	田丸稔 「彫刻の特質と、具象彫刻における独創性とは」
第14回	馬場 始三「データの利活用について考える」
第15回	磯谷晴弘 「美味しい水とは何か？について考える」

授業外学習

各授業ごとにレポート（その他）の課題を出し、その課題（その他）を講評する。

学習時間の目安：合計90時間

教科書

使用しない。

参考書

適宜案内する。

備考

特になし

年次	1 年
対象	23 ～ 21 FM
単位数	2．0 単位
担当教員	 一瀬隼  大庭大介  松永ルイ

授業の概要

本講では3人の講師、一瀬隼先生（3DCG制作）、大庭大介先生（現代絵画）、松永ルイ先生（現代絵画）が、各5回の授業を担当する。実践と理論を含めた「現代アート」を学び、新たな展開をつむぎだし、作品を構成する要素を再点検する。

【ICTを活用した 双方向型 授業】

本授業では、Google Classroom を活用して双方向型授業を展開します。

- ・ 授業内容を予め提示します。（予習 復習に活用してください。）
- ・ 課題はGoogle Classroom を 通じて提示し、提出していただきます。
- ・ 都度、必要な資料、確認しておくべき Web サイトなどを提示します。
- ・ 授業時間外での授業や 課題に関する質問は、 Google Classroom のストリーム機能を活用し、質問できるようにします。
- ・ 授業に関する学生相互の意見交換等を目的とし、 Google Classroom のストリーム機能を活用します。

到達目標

3DCG制作

- ・ 最前線で活躍するプロや各専攻分野の知識や技術を理解できる。
- ・ 職業としてのクリエイター/アーティストとしての意識を持つことができる。
- ・ 紹介される個々の事例について活発に質疑応答や討議を行い、それぞれの視座からの批評・鑑賞を持つことができる。
- ・ メディア・アートの領域がいかにして「職業」とつながり社会に貢献しているかについて理解出来るようになる。
- ・ 3DCG制作の取り組みとの比較において、メディア・アート活動の重要性について理解出来るようになる。

現代絵画

- ・ 現代絵画の実践と理論を理解し、制作に活かし、説明できる。

松永ルイ

- ・ 現代絵画の実践と理論を理解し、制作に活かし、説明できる。

評価方法

3DCG制作 3DCGの知識や技術、実例、またそれがいかに職業とつながり社会に貢献しているかについてのレポート（50%）
作品（40%）授業態度（10%）に基づいて総合的に評価する。

現代絵画 現代絵画の作品についてのレポート（50%）現代絵画の技術を用いた作品（50%）に基づいて総合的に評価する。

松永ルイ 現代絵画の作品についてのレポート（50%）現代絵画の技術を用いた作品（50%）に基づいて総合的に評価する。

注意事項

特になし

授業計画

一瀬隼

1. 映像制作会社「Barehand Modeling Studio」の最新事例紹介と事例研究、作品講評、Maya実習
2. 映像制作会社「Barehand Modeling Studio」の最新事例紹介と事例研究、作品講評、Maya実習

3. 映像制作会社「Barehand Modeling Studio」の最新事例紹介と事例研究、作品講評、Maya実習
4. 映像制作会社「Barehand Modeling Studio」の最新事例紹介と事例研究、作品講評、Maya実習
5. まとめ

大庭大介

1. 現代絵画と実践
2. 現代絵画と実践
3. 現代絵画と実践
4. 現代絵画と実践
5. 現代絵画と実践

松永ルイ

1. 現代絵画と実践
2. 現代絵画と実践
3. 現代絵画と実践
4. 現代絵画と実践
5. 現代絵画と実践

授業外学習

一瀬隼

- ・MAYAの3DCG 技術を授業外でも研鑽すること
- ・主には映画、VFX、3DCG、CM、プロモーション映像、アート映像、ゲーム映像、マンガ、アニメーション作品を鑑賞し、その制作意図や制作技法について可能な限りリサーチしておくこと。

大庭大介

- ・授業で紹介した作家や作品、展覧会についてインターネットや書籍などで調べること

松永ルイ

- ・授業で紹介した作家や作品、展覧会についてインターネットや書籍などで調べること

教科書

適宜指示する

参考書

適宜指示する

備考

特になし

年次	1 年
対象	23 ～ 21 FM
単位数	1 2 . 0 単位
担当教員	磯谷晴弘 張慶南

授業の概要

これまで制作してきた作品を振り返り、その良いところと足りない所を、距離をおいて客観的に振り返るところからはじめる。一度リセットするつもりで、コンセプト、制作技法、方法論、を検証する。工芸作品として、技法や細部に捕らわれすぎて近視眼的になりがちである事をふまえ、自分の目指す立ち位置を確認する。（磯谷）

窯の仕事（KILN）でなにが出来るかを考える。

窯を使って造るガラスの表情は様々である。温度と窯入れの環境などでガラスは色々な表情に変化し作家にその変化を見せてくれる。

作家の作為で造られた部分と作家の作為とは違って、無作為で造られるところもある。

どちらも捨て固いところがあることを認識し、自分の作品造りのために実験と試作を繰り返し、自分の作品造りの可能性を広げていきたいと思う。（張）

到達目標

- 1、造る事の意味を考えた作品を目指す。
- 2、時間をかけて作品を造り、その作品を感じ、論ずることが出来る。

評価方法

作品の評価 8 0 %（到達目標 1）

制作態度など 2 0 %、（到達目標 2）

注意事項

考える幅を狭くしないようにする。様々な可能性を探るように心がける。

授業計画

回数	内容
第1回	前期計画作成（磯谷・張）
第2回	ディスカッション（磯谷・張）
第3回	ディスカッション（磯谷・張）
第4回	ディスカッション（磯谷・張）
第5回	作品講評（磯谷・張）
第6回	ディスカッション（磯谷・張）
第7回	ディスカッション（磯谷・張）
第8回	ディスカッション（磯谷・張）
第9回	作品講評（磯谷・張）
第10回	ディスカッション（磯谷・張）
第11回	ディスカッション（磯谷・張）
第12回	ディスカッション（磯谷・張）
第13回	ディスカッション（磯谷・張）
第14回	ディスカッション（磯谷・張）
第15回	前期総評（磯谷・張）

回数	内容
第16回	後期計画作成（磯谷・張）
第17回	ディスカッション（磯谷・張）
第18回	ディスカッション（磯谷・張）
第19回	ディスカッション（磯谷・張）
第20回	作品講評（磯谷・張）
第21回	ディスカッション（磯谷・張）
第22回	ディスカッション（磯谷・張）
第23回	ディスカッション（磯谷・張）
第24回	作品講評（磯谷・張）
第25回	ディスカッション（磯谷・張）
第26回	ディスカッション（磯谷・張）
第27回	ディスカッション（磯谷・張）
第28回	ディスカッション（磯谷・張）
第29回	ディスカッション（磯谷・張）
第30回	後期総評（磯谷・張）

授業外学習

自分の作品を発表する事を心かける。また、他の作家の作品を観覧する事で形体や素材などについて研究する。

教科書

使用しない。

参考書

適宜指示する。

備考

特になし

年次	2 年
対象	22 ～ 20 FM
単位数	1 2 . 0 単位
担当教員	磯谷晴弘 張慶南

授業の概要

自分（コンセプト）と素材と技法の最適な関係を見つけ出す。その関係は時として心地よいものではないかも知れないが、チャレンジすることを心掛ける。いちど構築された関係性は、以前に比べて強固なものになっているはずである。（磯谷）

オリジナル作品を目指してほしい。

造ることについて自信を持つことは大事である。しかし、自信感のある作品を造ることは他のものが持たなくて、自分だけが持つことにつながることもある。

このような差別化を持つことは、オリジナル性の高い作品を持つと同時に、自信感を得ることになる。修了制作展と修了してからの作家活動まで考えた作品造りを構築する授業にしたいと思う。また、他のガラス作家の作品展をよく見るとともに、違う素材を使った作品からも様々な検証とともに理解を深めることをしたいと思う。（張）

到達目標

造る事の意味を考えた作品を目指す。（到達目標 1）

時間をかけて作品を造り、その作品を感じ、論ずることが出来る事を目指す。（到達目標 2）

修了制作の完成と研究報告書の作成。

評価方法

作品の評価 8 0 %（到達目標 1）

制作態度など 2 0 %（到達目標2）

注意事項

考える幅を狭くしないようにする。様々な可能性を探るように心がける。

授業計画

回数	内容
第1回	前期計画作成（磯谷・張）
第2回	ディスカッション（磯谷・張）
第3回	ディスカッション（磯谷・張）
第4回	ディスカッション（磯谷・張）
第5回	作品講評（磯谷・張）
第6回	ディスカッション（磯谷・張）
第7回	ディスカッション（磯谷・張）
第8回	ディスカッション（磯谷・張）
第9回	作品講評（磯谷・張）
第10回	ディスカッション（磯谷・張）
第11回	ディスカッション（磯谷・張）
第12回	ディスカッション（磯谷・張）
第13回	ディスカッション（磯谷・張）
第14回	ディスカッション（磯谷・張）
第15回	前期総評（磯谷・張）

回数	内容
第16回	後期計画作成（磯谷・張）
第17回	ディスカッション（磯谷・張）
第18回	ディスカッション（磯谷・張）
第19回	ディスカッション（磯谷・張）
第20回	作品講評（磯谷・張）
第21回	ディスカッション（磯谷・張）
第22回	ディスカッション（磯谷・張）
第23回	ディスカッション（磯谷・張）
第24回	作品講評（磯谷・張）
第25回	ディスカッション（磯谷・張）
第26回	ディスカッション（磯谷・張）
第27回	ディスカッション（磯谷・張）
第28回	ディスカッション（磯谷・張）
第29回	ディスカッション（磯谷・張）
第30回	後期総評（磯谷・張）

授業外学習

自分の作品を発表する事を心かける。また、他の作家の作品を観覧する事で形体や素材などについて研究する。

教科書

使用しない。

参考書

適宜指示する。

備考

特になし

年次	1 年
対象	23 ～ 22 FM
単位数	2．0 単位
担当教員	👤 三宅通博

授業の概要

本授業では、素材を知るために必要な化学の基礎を概観し、陶磁器、油絵、日本画などで絵具として使われている顔料について、機器分析による評価を通して材料化学的観点から素材とその化学的性質を学ぶ。

【ICTを活用した 双方向型 授業】

本授業では、Google Classroom を活用して双方向型授業を展開します。

- ・授業内容を予め提示します。（予習 復習に活用してください。）
- ・課題はGoogle Classroom を 通じて提示し、提出していただきます。
- ・都度、必要な資料、確認しておくべき Web サイトなどを提示します。
- ・授業時間外での授業や 課題に関する質問は、 Google Classroom のストリーム機能を活用し、質問できるようにします。
- ・授業に関する学生相互の意見交換等を目的とし、 Google Classroom のストリーム機能を活用します。

到達目標

顔料の性質を理解し、顔料の材料化学的な視点を活かした制作ができるようになる。

評価方法

課題に関するレポートで評価する。レポート（100％）で評価する。

注意事項

材料化学的な視点は作品制作に縁遠いようであるが、将来役に立つと思われるので、休まず続けて出席することが重要である。なお進捗状況により講義内容を追加することがある。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、材料化学の基礎（1）
- 第2回 材料化学の基礎（2）
- 第3回 材料化学の基礎（3）
- 第4回 材料化学の基礎（4）
- 第5回 材料化学の基礎（5）
- 第6回 顔料の合成法（1）
- 第7回 顔料の合成法（2）
- 第8回 顔料の合成法（3）
- 第9回 顔料の評価法（1）
- 第10回 顔料の評価法（2）
- 第11回 顔料の評価法（3）
- 第12回 代表的な顔料各論（1）
- 第13回 代表的な顔料各論（2）
- 第14回 代表的な顔料各論（3）
- 第15回 材料の安全性と有害性、まとめ

授業外学習

学習時間の目安：合計60時間

講義で説明した内容について、配布資料を読んで復習し、理解できなかった箇所を質問すること。

教科書

資料を配布する。

参考書

必要に応じて適宜紹介する。

備考

17世紀のオランダを代表する画家フェルメールが好んで使用した魅力的な青色顔料は、希少で高価なウルトラマリン（ラピスラズリ）という鉱物であるが、今では粘土やソーダ灰を原料としてそれを作ることができる。